

聖路加看護学会

ニュースレター

第13回聖路加看護学会学術大会を終えて 第13回聖路加看護学会学術大会をふりかえって 第13回聖路加看護学会学術大会報告 座長・司会者のメモから
大会参加者からのメッセージ 総会の焦点 第14回聖路加看護学会学術大会のご案内 お知らせ 編集後記

第13回聖路加看護学会学術大会を終えて

第13回学術大会長 杉本 正子

「死生観を育む」をメインテーマに第13回学術大会を、沢山の方々のサポートのもと、多くの皆様にご参加いただき、無事に終了することができました。心から感謝致します。

生を受けた者が、長短の差はあれ、等しくいつか必ず迎えるであろう死。聖路加同窓会発行会員名簿の自分たちの卒業年度の左側が年々薄くなるごとに、死はだんだんと身近なものになってきます。死は一度体験してみて、ゆっくり対策を練ることも出来ません。それ故死は、私たちを不安にさせます。

私たち看護者は、死に臨む人々をできるだけ安楽に、できるだけ日常生活を損ねないように、沢山の知恵と技を学んできました。また患者さんの闘病から、そして亡くなるプロセスを通して、患者さんやご家族から様々なことを教えて頂きました。医療の現場においては、ともすれば治療や処置が優先され、人間としての尊厳や誇り、基本的な生活の大事さが軽視されがちです。教えていただいた沢山の蓄積を、患者さんやご家族の最も近くに寄り添う看護者として大きな声で主張しましょう。今のこの時を自分らしく精一杯生きることが、それぞれの死生観の育みにつながるものと考えます。

人は生まれるときも死ぬときも一人...と言いますが、けっして一人で旅立つのではないと私は思っています。ひと足お先に逝かれた方々が、生きている人には見えない手で、次の大いなる冒険旅行へと導いてくださるでしょう。

広く看護実践科学の探求とその教育の知の蓄積を目指す聖路加看護学会の更なるご発展を祈っています。

第13回聖路加看護学会学術大会をふりかえって

秋日和の9月27日(土曜日)聖路加看護大学にて、第13回聖路加看護学会学術大会が開催されました。今大会長は東邦大学医学部看護学科の杉本正子先生で、講演テーマは「End of Life 看護師にできること」でした。先生のライフワークである在宅ホスピスケアに関する貴重な調査データを題材に、終末期に看護師に求められることについて語られました。病院で死亡した患者と在宅で死亡した患者の死亡4週間から1週間までを食事、排泄などの患者の日常生活行為やチューブ装着の有無を丁寧に調査された結果、在宅の患者がより日常の生活に近い状況であったこと、また病院患者の処置などは本当に必要性があるのかが示されました。講演後の質疑応答では、在宅ホスピスケアでの生活の質を確保・維持するために、それを支える訪問看護の責任の重さが確認されました。

一般口演8題、示説11題が3会場で同時進行されました。そのためかどの会場もごちんまりとアットホームな雰囲気、先輩会員から発表者への質問やねぎらいの言葉がかけられ、聖路加看護学会のカラーが出ていたように思います。

交流集会は「ホメオパシーとパッチフラワーレメディ」「カラーセラピー」「看護・介護の補完・代替療法」が紹介されました。ターミナルケアなどの場面では必ずしも科学的データのみが最優先されるわけではなく、今交流集会は様々な補完代替療法の内容を知る希少な機会となりました。魅惑的な色

や香りによるやすらぎや癒し効果が期待されている自然の力を教えていただくことができました。

聖路加看護学会理事会主催の学術交流ひろばでは聖路加同窓会、聖路加国際病院、聖路加看護大学図書館、WHOプライマリヘルスケア看護開発協力センター、看護実践開発研究センターの活動や21世紀COEプログラムの成果が展示で紹介されました。

午後からは松本市浅間温泉の神宮寺住職である高橋卓志氏から「メメント モリ 寄り添うということ」の特別講演があり90分の長時間にわたり「死から見る生」をテーマに講義を拝聴しました。高橋氏の僧侶としてのご経験、命の最後をみていない仏教批判からの命を育む国際的な活動、地域に根ざした命の社会教育活動など豊富な講義内容と刺激的なパワーポイントの画面に最後までひきつけられました。看護師が向き合わざるを得ない身近なお話でしたので、時には目頭が熱くなり、また共感し啓発されるお話でした。

学会参加者は例年とほぼ同様の136名でした。例年通り昼休みを利用して総会が開催され、次期大会は平成21年9月26日(土曜日)に聖路加看護大学の堀内成子先生を大会長に聖路加看護大学で開催される予定が発表されました。

第13回聖路加看護学会学術大会事務局：

美ノ谷新子

第13回 聖路加看護学会学術大会報告

【日 時】 2008年9月27日(土)
10:00~15:00
【会 場】 聖路加看護大学
【大会長】 杉本 正子
(東邦大学医学部看護学科)
【テーマ】 「死生観を育む」



受付

会長講演 アリス C. セントジョン
メモリアルホール 10:05~10:45
「End of Life 看護師にできること」
会 長 杉本 正子 (東邦大学医学部看護学科)
座 長 堀内 成子 (聖路加看護大学)

特別講演
アリス C. セントジョン メモリアル
ホール 13:15~15:00
「メント モリ よりそうとい
うこと」
演 者 高橋 卓志
(浅間温泉 神宮寺住職)
座 長 村岡 宏子
(東邦大学医学部看護学科)



会場からの質問

口 演

【第1群】第I会場 (301講義室) 10:50~11:35

座長 麻原きよみ (聖路加看護大学)

- 看護大学における健康情報サービス活動が育んだコミュニティとのつながり
高橋 恵子 (聖路加看護大学大学院博士後期課程)
印東 桂子 (聖路加看護大学大学院博士後期課程)
山田 雅子 (聖路加看護大学)
石川 道子 (聖路加健康ナビスポット)
山岡 栄里 (聖路加健康ナビスポット)
大久保菜緒子 (日本伝統医療科学大学院大学)
松本 直子 (聖路加看護大学)
内田千佳子 (元聖路加看護大学 COE 研究員)
菱沼 典子 (聖路加看護大学)
- 精神疾患患者へのセルフマネジメントプログラム (CDSMP) の評価
宇佐美しおり (熊本大学保健学教育部)
馬場 香織 (熊本大学保健学教育部)
岡谷 恵子 (熊本大学保健学教育部)
湯川 慶子 (東京大学大学院医学系研究科大学院生)
- 生活習慣病を予防するための新たな健康教育方法への取り組み
支援の経過と行動に影響を及ぼす要因の分析 -
佐藤 憲子 (宮城大学看護学部)
只浦 寛子 (宮城大学看護学部)
大須賀ゆか (宮城大学看護学部)
吉田 俊子 (宮城大学看護学部)

【第2群】第I会場 (301講義室) 11:35~12:30

座長 林 直子 (東邦大学医学部看護学科)

- 公衆衛生看護における災害緊急時の危機管理のあり方について
- 第1報 米国サンディエゴの疫学バイオテロ保健師の理論と実践 -
野地 有子 (新潟県立看護大学)
齋藤 あや (San Diego Bayside Community Center)
- 公衆衛生看護における災害緊急時の危機管理のあり方について
- 第2報 米国サンディエゴの大規模森林火災から学んだこと -
齋藤 あや (San Diego Bayside Community Center)
野地 有子 (新潟県立看護大学)

【第3群】第II会場 (302講義室) 10:50~11:35

座長 荒賀 直子 (順天堂大学医療看護学部)

- 心臓リハビリテーション維持期における継続的支援の現状と課題
心リハスタッフへのヒアリング調査を通して
山田 緑 (東京医療保健大学)
池亀 俊美 (聖路加国際病院)
福田美和子 (東邦大学)
北島 泰子 (東京医療保健大学)
伊東 春樹 (榊原記念病院)
- 独居利用者を対象とする在宅ターミナルケアの可能性
訪問看護師とホームヘルパーのケアの工夫

- 土田 靖子 (川崎市立井田病院)
8 看護師の死生観の育み
檀谷ひとみ (東邦大学医療センター大森病院)

示 説

掲示10:50~12:20

- 【第4群】第III会場 (2階ラウンジ) 10:50~11:20
9 バングラデシュ農村部における母子保健の現状 第1報
- ボグラ県ゴケル郡での調査報告 -
五味 麻美 (慶應義塾大学)
10 タイの人々が一般症状に対して行う伝統医療
比嘉 優 (日本医科大学附属病院)
11 在外日本人中高生の健康問題と養
護教諭の役割
高橋 知子 (聖路加国際病院)
長松 康子 (聖路加看護大学)
12 タイ都市部におけるタイ人父親の
育児参加状況とタイ人女性が夫に
望む育児協力
園田 希
(聖路加看護大学大学院看護学研究科)
Benchaporn Sukprasert
(聖路加看護大学大学院看護学研究科)
長松 康子 (聖路加看護大学大学院看護学研究科)



示説会場

【第5群】第III会場 (2階ラウンジ) 11:20~11:50

- 都市部における多世代交流型デイプログラムの9か月の評価; 高齢者の心
の健康と小学生の高齢者観の変化
亀井 智子 (聖路加看護大学)
梶井 文子 (聖路加看護大学)
糸井 和佳 (聖路加看護大学)
川上 千春 (聖路加看護大学)
- 都市部多世代交流型デイプログラムにおける世代間交流に対する高齢者の
受けとめ方
糸井 和佳 (聖路加看護大学)
亀井 智子 (聖路加看護大学)
梶井 文子 (聖路加看護大学)
川上 千春 (元聖路加看護大学 COE 研究員)
- 脳卒中退院後施設療養へ移行した患者の特徴 療養者の背景から
美ノ谷新子 (東邦大学)
杉本 正子 (東邦大学)
福嶋 龍子 (宮城大学)
- 在宅非がん後期高齢者の終末期・臨死期における訪問看護師の看護判断
宮近 郁子 (田園調布医師会立訪問看護ステーション)

【第6群】第III会場 (2階ラウンジ) 11:50~12:20

- 産後サービスの価格算出 PSM分析を用いて
松永 佳子 (東邦大学)
- 新人看護師への移行演習プログラム開発プロセス [実践報告]
飯田 正子 (聖路加国際病院)
高屋 尚子 (聖路加国際病院)
寺田 麻子 (聖路加国際病院)
西野 理英 (聖路加国際病院)
桃井 雅子 (聖マリア学院大学)
佐藤エキ子 (聖路加国際病院)
井部 俊子 (聖路加看護大学)
松谷美和子 (聖路加看護大学)
平林 優子 (聖路加看護大学)
佐居 由美 (聖路加看護大学)
卯野木 健 (聖路加看護大学)
- 運動性失語症患者とそのキーパーソンのコミュニケーション促進因子と
阻害因子の検討
高野とも子 (聖路加看護大学)
大久保暢子 (聖路加看護大学)

交流集会

10:50~13:00

【交流集会1】第IV会場 (401講義室)

- ホメオパシーとパッチフラワーレメディってなに? その人らしさを取り
戻す療法
中村 順子 (やすらぎの森)
築地 太郎 (やすらぎの森)

【交流集会2】第V会場（402講義室）

21 カラーセラピー 自身が選ぶカラーからのメッセージ
米澤 純子（日本赤十字看護大学）

【交流集会3】第VI会場（404講義室）

22 看護、介護における補完・代替療法の可能性 がん患者の支援を中心に
石田 千絵（昭和大学保健医療学部看護学科）

【学術交流ひろば】第III会場（2階ラウンジ）10：00～14：00

聖路加看護学会 理事会企画

田代 順子 及川 郁子 川口 千鶴 木下 幸代 佐藤エキキ
高木 廣文 田中美恵子 中村めぐみ 大久保暢子 大隅 香

聖路加同窓会、聖路加国際病院、聖路加看護大学図書館、WHO プライマリヘルスケア看護開発協力センター、看護実践開発研究センターがそれぞれで取り組んでいる活動や事業の紹介、さらに本年3月に研究期間が終了した21世紀 COE プログラムの成果が2階ラウンジに展示されました。



学術交流ひろば

座長・司会者のメモから

【会長講演】

杉本会長ご自身が気に入っている研究ご紹介ということだった。がん患者の病院死と在宅死とを比べたものだった。亡くなる4週間前から死の旅立ちまでの生活（食事・排泄・清潔）の様相であった。

在宅死では、基本的な生活が死ぬ1週間前でさえも自立してできていた。在宅死の人々は「自分を冷静に捉えることができた」というのに対し、病院死の人々は「家に帰りたい、1人でトイレに行きたい」という欲求を述べていた。基本的欲求である生活を整えるという看護の本質をみた思いであった。フロアから会長の引用したハリエポッターのことは「きちんと整理された心を持つ者にとっては、死は次の大いなる冒険にすぎない」。この「整理された心」とは死ぬ間際のまでの日常生活が満たされていると在宅死の人々のことをイメージした感想が寄せられた。（堀内 成子）

【第1群 第I会場 口演】

第1群の3題は、新たな活動やプログラムの効果に関する発表でした。1題は看護大学におけるいくつかの健康情報サービス活動がコミュニティとどのようにつながっていったかをモデル化したもの、1題は精神疾患を持つ人々へのセルフマネジメントプログラムの評価を試みたもの、1題はwebとセミナー形式の併用による生活習慣病予防のための健康教育方法の評価に関するものでした。効果的な看護実践のためのプログラムの多様性を知り、新しい取り組みのための評価の重要性を確認する機会になったと思います。（麻原きよみ）

【第2群 第I会場 口演】

米国サンディエゴにおける疫学バイオテロ保健師の育成の背景と具体的活動内容、また近年、相次いで発生した森林火災における保健師活動についての2題発表であった。

サンディエゴの都市の特性（米国最大の海軍基地であること、メキシコとの国境であること）を踏まえたディスカッションが行われた。（林 直子）

【第3群 第II会場 口演】

心臓リハビリの発表は先行研究に基づいた継続研究であり、今後の成果が期待されます

在宅ターミナルケアの可能性についての研究発表は患者きるかを検討しており、今後の調査対象数を増やし研究を続けられることを期待します

看護師の死生観の育みについては、まだ始められたばかりの研究でしたが、興味深いテーマでした。調査項目をさらに検討されて良い研究とされることを期待します。

時間が短く、質問が十分にできなかった部分もありましたので、今後検討していただければと思います。（荒賀 直子）

【第4・5・6群 第III会場 示説】

ポスター会場では、国内の在宅ケア領域や地域・病院での各種プログラムをはじめ、タイやバングラデシュでの調査まで、様々なテーマの研究報告がなされました。発表時間を過ぎてても質疑応答はつきず、各所で議論の輪ができるなど、参加者の関心の高さが伺えました。そのテーマの多様性から、今後の看護研究の可能性を感じさせる、刺激的なセッションとなりました。

【特別講演】

高橋卓志氏（浅間温泉 神宮寺住職）による「メメント モリ よりそうということ」は、90分のなかで何度も目頭が熱くなる感動的な講演だった。メメント モリは、「死を思え」という意味だが、「死」はすべての終わりなのか、

死の先に何かがあるかを深く考えさせられた。高橋氏は、さまざまな題材を用いて死と生きるということを語りかけていた。たとえば、中世ドイツの散文詩「ボヘミアの農夫」にみられた「死との対決」、1980年代に活躍した写真家でジャーナリストの岡村昭彦との出会い、みずからがタイのHIV自立支援に関わった体験などである。最後の締めくくりは、森山直太郎の歌「生きてることが辛いなら」であった。それぞれが、この歌に「何を感じるのか」を問いかけられた。高橋氏は松本市において、その人がその人らしく「生まれ、嫁いで、老いて」いけるような地域システム作りをエネルギーギッシュに展開しておられる。丸木夫妻の「原爆の図」があるこのお寺へ、是非訪ねてみたくなった。

（東邦大学 村岡 宏子）

参加者からの一言メッセージ

交流集会のカラーセラピーは選ぶ色によってその人の気持ちのベースや、これら先に向かってく方向をみてゆくのが面白いと思いました。

看護に活用できる可能性があると思います。（部屋の色とか香りとか）心を落ち着かせる効果がある様に思います。

交流集会の内容が興味深かったです。

ホメオパシー、カラーセラピー、両方とも参加したかったです。（東京）

2階ラウンジの展示が素敵でした。

見て勉強になり、触って楽しく、聞いてウキウキする展示でした。

（東京 S）

1) 1年1回の本学会が年々淋しくなっていることは時代の動きか？ 淋しい限り

2) 看大学生の出席が殆ど0

3) 医師会員を増やすこと（内部聖ルカ）

病院の幹部関係者が看大学会に関心をもつこと

（東京、内科医師 H.T）

交流集会、パッチフラワーレメディで自分の状況にあったレメディを教えてください、ストレスや困難を乗り越える方法を知ることができました。（Y.S）

カラーセラピーの会場は、様々な透明な色のびんがあり、部屋に入る自然光と上手く調和し、入っただけで気持ちが明るくなりました。

色の持つ癒しの POWER を感じました

（明石町 30歳代）

交流集会で温灸を体験しました。灸で温まった灸から POWER が注入されたように感じました

（中央区）

補完・代替療法の温灸療法を体験するコーナーがありました。肩こりや疲労のたまった人が体験すると、表情が明るくなり、笑顔で帰っていかれました。

（神奈川、20代、K.N）

温灸療法の会場では、実際に教室に入ってきた方に話をするだけでなく、体験してもらうことで、見に来た方から感動の声を聞くことができました。初めて知ったという方もいました。実際に体験することで、何が良いのか、どの方法が適するののかという事を考えやすくなると思います。

そして、ケアの幅が広がっていくと思いました。（東京都 22歳 W.N）

第13回聖路加看護学会総会が9月に終わり、このたび14年目からの3年間、理事長として務めさせていただくことになりました。昨年度までは学術交流委員として学会活動に参加してまいりましたが、会則や総会資料に真剣に向き合いましたのは、この9月の以降のことです。これまで、学会を創設し、成長に導いてこられた常葉恵子先生をはじめ歴代理事長、学術集会を盛り上げてこられた歴代大会長、そして会員の皆さまのご努力に、こころより敬意を表したいと思います。

256名の会員数でスタートした本学会は、2008年度には573名となり、学会誌への投稿論文数も94を数えるに至っています。また、前任の田代順子理事長のもと、取りまとめられた将来構想委員会報告には、「上級実践家の育成と研鑽」「市民主導型のケアを開発」「看護実践とその実践を支える人材とネットワーク形成」「研究のグローバル化」といった視点での提言が示されており、何より、聖路加看護学会がこれまで大切にしてきた看護実践を科学するといった観点での学会活動を、今後更に発展させて取り組んでいくべきという方向性が強く示されています。今日では、看護学修士、看護学博士、そして専門看護師、認定看護師といった看護研究者や上級実践を担う看護職が多く輩出される時代になってまいりました。日ごろの活動成果を発表すること、自己の研究力、実践力に更に磨きをかけること、そして互いに議論しあう仲間作りなどを通して、会員の皆さまが活動を広げていくための支援をしていくことが本学会に求められている役割と考えております。

聖路加看護学会は聖路加看護大学卒業生だけの学会ではありません。看護実践を高め、広めていく力を発揮していく看護職を、アカデミックな側面から広く支援し、大きなネットワークにつなげていくことを目指してまいりたいと思います。会員の皆様方のご意見を頂戴しながら進めて参りたいと存じます。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

第13回聖路加看護学会総会の焦点

聖路加看護学会 高木廣文, 大久保暢子 (庶務担当)

第13回聖路加看護学会総会は、2008年9月27日土曜日に出席者54名、委任状提出者465名により開会されました。学術大会長である杉本正子氏を議長として、2008年度の理事会報告、活動報告、会計報告、そして次期評議員ならびに役員選挙結果報告、2009年度の事業計画案および予算案について説明、質疑応答がなされました。総会の議題はすべて承認されました。

今回の総会の焦点は、将来構想委員会による「学会への課題と提言」と、選挙管理委員会による「次期評議員ならびに役員選挙結果報告」でした。役員交代の時期であることから、今期将来構想委員会より、1. 財政基盤の磐石とするための市民・学生・退職者の入会費免除、特別会費制度の設定、2. 学会誌への投稿数、学術大会への演題数増加のための、学会誌および学術大会での表彰制度の設定、3. 大学院や看護実践開発センターの行事との連携、4. 学会誌編集作業の体制の見直し、5. 聖路加国際病院との連携、6. 専門看護、上級看護実践、看護歴史、市民主導型ケア等との連携強化が、学会への課題と提言として報告されました。

また、役員選挙結果として、評議員32名、理事7名、監事2名が報告され、新理事長には、聖路加看護大学看護実践開発研究センターの山田雅子センター長が選ばれ、承認されました。上記の課題と提言に加え、2009年度事業計画案として、1. 第14回学術大会の開催、2. 学会誌第13巻の発行、3. ニュースレター24、25号の発行、4. 会員相互の学術的交流、5. 会員の拡充、6. 同窓会との連携、7. 日本看護系学会協議会および看護系学会等社会保険連合、8. 将来検討(将来構想検討委員会の継続)、9. 学術交流のあり方の検討が報告されましたが、新理事長のもと、より一層の活動が期待できるものと思います。

今後も本学会が広く社会に貢献できる学術団体として発展できるよう、会員皆様のご助言、ご支援をよろしくお願ひ申し上げます。

第14回聖路加看護学会学術大会のご案内 (第1報)

日時: 2009年9月26日(土)

会場: 聖路加看護大学

大会長: 堀内 成子 (聖路加看護大学)

テーマ: 「ファーストクラスをめざす道

ケアの未来を拓く」(仮)

学術大会事務局: 〒104-0044 東京都中央区明石町10番1号

聖路加看護大学 26研究室 (大隅香 小黒道子)

FAX 03-5550-2265

E-mail: slnr14@slcn.ac.jp

聖路加の創設者であるトイスター博士と同時代に生きた清里の父ポール・ラッシュの言葉は、多くの若者を魅了します。「Do your best, and it must be first class. (最善を尽くせ、しかも一流であれ)」この道につづく職業人になるようプログラムを企画しました。実践・教育・研究分野で活躍なさっている演者からの講義と質問という形式をとります。実践では 熟練者による技の伝承、教育では 省察的实践をめざす成人教育、医療看護学をつなぐ教育、研究では 解釈学的現象学、概念分析からプログラム開発へ、の6本の Review Lecture (系統的な講義) を予定しています。

お昼は、ランチョンミーティングでお腹と頭脳を満たす時間を考えています。一般演題の発表形式は、ポスターによる発表をメインにしたいと考えており、また留学生を交えての「英語で発表・討論しよう」というセッションも予定しています。

秋の一日、聖路加看護学会でファーストクラスの演者からの講義をまとめて聞いてみませんか。詳細は決まり次第学会 HP にてお知らせします。

来年の9月の5連休の次の土曜日に皆さんとお会いできることを楽しみにしております。

お知らせ

学術交流委員会

今年度の学術交流会は初の試みとして、9月27日聖路加看護学会学術大会終了後に開催し、参加証を発行しました。テーマは「看護の目から見直そう医療の中の衣食住 医療づけにしないためのケアのあり方」とし、聖路加国際病院: 西野氏よりメリハリのある入院生活をめざしてパジャマを脱ぐ試みについて、青梅慶友病院老人看護 CNS: 桑田氏より口から美味しく食べるための工夫について、聖路加看護大学博士課程: 大橋氏より快適な一日をつくるモーニングケアの意義について発表後に討議の時間を持ち、患者のQOLを向上させる看護ケアとその基盤となる看護師の感性の大切さが浮き彫りになりました。内容の詳細は次号に掲載されますので是非ご一読下さい。(前担当理事: 中村めぐみ)

学会誌編集委員会

学会誌は2008年度より3号(大会号を含む)発行しています。今年度は、2009年1月、7月、9月(大会号)の予定で、現在1号の発刊に向けて作業を進めております。2号の締め切りは2009年2月です。2009年度より編集委員が交代となりますが、ますますの投稿ならびに編集へのご協力をお願い致します。(2008年担当理事 木下・及川)

庶務

- ・去る9月27日に聖路加看護学会第13回総会を開催致しました。任期終了に伴い、新役員が決定し、新理事長(山田雅子氏 聖路加看護大学看護実践開発研究センター センター長)のもと、活動が始まっています。
- ・現在の会員数は573名です。会員の皆様、周囲の方々にも本学会への勧誘をお願いいたします。
- ・皆様の勤務先や所属、住所などの変更がありましたら、本部事務局まで速やかにご連絡くださいますようよろしくお願い申し上げます。事務局への連絡は、郵便、Fax、E-mail のいずれかでお願ひ致します。E-mail address: slnr@slcn.ac.jp Fax: 03-5565-1626 (前期担当理事: 高木廣文 大久保暢子)

会計

2009年度の年会費納入受付を開始いたします。(本学会の会計年度は10月1日から翌年9月末日です) 学会誌の発行回数が1回から2回に増えたため、年会費は2006年度より8,000円となっております。過去の納入がお済でない方は、本年度分とあわせて納入いただくと助かります。

何かご不明な点などありましたら、Fax03-5803-0154か、kouko.rhn@tmd.ac.jp (大久保功子) にお問い合わせください。よろしくお願ひいたします。

振込み先: 郵便振替口座 00100-8-670371

加入者名 聖路加看護学会 (担当理事: 大久保功子)

編集後記

本号は前委員会が発行いたしました。次号からは、新しい委員会が担当されます。今後ともニュースレターをお願いいたします。(ニュースレター委員会)